

壱岐島



しくみ

- 原の辻遺跡祭儀場568.87km - 檜原神社 - 大沼浮島568.87km
- 国片主神社 534.75km - 奈具神社 - 大沼浮島534.75km
- 左京鼻岬 観音柱 533.30km - 真名井神社 - 大沼浮島533.30km
- 小島神社・奥宮? 564.165km - 源九郎稻荷神社 - 大沼浮島 564.165km
- 小島神社・奥宮? 550.435km - 穴太寺 - 大沼浮島 550.435km
- 大神宮神社 536.22km - 智恩寺 - 大沼浮島 536.22km
- 嶽宮神社 542.62km - 宇治神社 - 大沼浮島 542.62km

詳細

- 原の辻遺跡祭儀場568.87km - 檜原神社 - 大沼浮島568.87km

左極（老岐島）

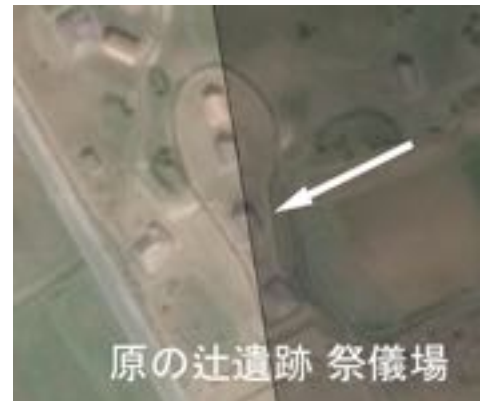
原の辻遺跡 祭儀場

弥生時代の環濠集落で、『魏志』倭人伝に記された「一支国（いきこく）」の王都に特定された遺跡。

「祭儀場」としての機能が 想定されることとなった理由は、地形が周囲よりも1~2mほど高く盛り上がり、丘陵最高所の尾根に沿って配列された建物跡で、主軸方向がほぼ等しいこと。周辺から隔絶された特殊な空間。何らかの特別な意図があって構築されたものと考えられる。

<http://www.iki-harunotsuji.jp/wp-content/themes/notsil/pdf/23report.pdf>

長崎県老岐市芦辺町深江鶴亀触1092-1



中道角

檜原神社 （三鳥居奥）

式内社 大和國城上郡 卷向坐若御魂神社

御祭神 天照大神若御魂神 伊弉諾尊 伊弉册尊

檜原台地に建つ檜原神社は、大神神社付近の摂社群の中では、最も北に位置している上に社格も最も高く創建も古い。天照大神が伊勢神宮に鎮座する前に、宮中からこの地に遷され、この地で祭祀されていた時代がある。伊勢神宮へ遷されると、その神蹟を尊崇して、檜原神社として引き続き天照大神を祀ってきた。そのため、この神社は広く「元伊勢」の名で親しまれている。

寛政年間の台風によって、檜原神社は大きな被害をこうむり廃墟と化してしまった。だが廃墟のまま祭礼は行われてきた。戦後になって、現在のように整備された。三輪山の中にある磐座をご神体に行っているため、檜原神社には本殿はなく、拝殿もない。だが、大神神社では見えなかった三輪特有の「三輪鳥居」とその奥にある神籬（ひもろぎ。神霊が降臨する時の臨時の宿り場所。小さな樹木や岩石が選ばれる）などが再建されている。

奈良県桜井市三輪 奈良県桜井市大字三輪1422

左極

大沼の浮島

湖畔にある大沼浮嶋稲荷神社（祭神/宇迦之御魂神）の神池とされ狐の形をしている。沼には大小の葦の島が風や流れに関係なく浮遊し、江戸時代には国の数 32 あり、その動きで吉凶を占っていたとされる。沼は白竜湖とも呼ばれ弁財天が祀られている。大円寺『朝日嶽縁起』（1505年）によると、朝日岳の麓に御手洗の「大富沼」があると記されている。

白鳳9年(681)役の小角(役の証覚・役の行者)が弟子の覚道を連れて出羽路に来た折、大谷川(朝日町大谷)のほとりで梵字が記された板碑が流れくるのを見つけ、川をさかのぼり、60余りの島が浮遊する神池大沼を見つけた。湖畔に浮島稲荷大明神を祀り、弟子覚道を別当(大行院)とし朝日岳修験が行なわれた。建久4年(1193)には寒河江荘地頭となった大江広元の進言により源頼朝の祈願所になり、その後も大江家、徳川家、最上家にも祈願所として崇敬された。国指定名勝。

山形県西村山郡朝日町大沼

備考/浮島は、現在は数も減り、岸に付き動かないことが多いが、動く時は流れや風に関係なく意志があるかのように動き回り驚く。役の小角は梵字が書かれた板碑が流れてきたのを見つけたのだから、すでに大沼は異教徒の浮島信仰の地だったはず。稲荷神社の神池とされるが、元々「大富沼」が大沼なら出雲系「富一族」の祀る沼だったのだろう。大朝日岳にも大富観音が祀られていた。元々弁財天や龍神の神池に稲荷神が祀られたのだと考えられる。あるいは、730年に「大沼社を南西の丘に移す」記述があるが、その時に稲荷社にすり替えられたのかもしれない。いずれにせよ、古しくみはほとんどが稲荷神社ではなく大沼の鳥居の立つ「出島」(写真)が起点となっている。弁財天を祭神とする大沼浮島社(仮称)はここにあったはず。全国に散らばる浮島神社の総本宮ではないか。そして、多くの神社の神池に浮島のごとく島が作られ弁財天や市杵島姫が祀られているのも本来は分社だったのではないだろうか。池に囲まれた古墳すらも浮島に見えてくる。古代史を探る時、きっと浮島信仰は重要な鍵になると思われる。

■ 国片主神社 534.75km - 奈具神社 - 大沼浮島534.75km

国片主神社

祭神/少彦名命(すくなひこなのみこと・エビス様)

壱岐の式内社24社の一つ 壱岐七社の一つ

江戸時代、延宝四年の神社改めの時、橘三喜が、この周辺の村の名前が国分であることから、神社も国片主神社にしました。祭神である、少彦名命と大國主命が、国を二分して治めていたから、国片主神社にしたとも言われていますが、どうしてこのような神社の名前になったのかよくわかりません。別名、国分天満宮ともいいます。それまでは、「天満宮」といわれていて、菅原道真とその妻の吉祥女を祀っていました。

<http://www.ikishi.sakura.ne.jp/ikinokunikatanushizinzya.html>

長崎県壱岐市芦辺町国分本村触 1 3 6 9



奈具神社

むかし、丹波の郡比治の真奈井に天下った天女が、和奈佐の老夫婦に懇願されて比治の里にとどまり、万病に効くという酒を醸して、老夫婦は莫大な富を得ました。しかし、悪念を抱いた老夫婦はやがて天女に、汝は吾が子ではないと追い出してしまいました。「天の原ふりさけみれば霞立ち家路までいて行方しらずも」と詠って、比治の里を退き村々を遍歴の果てに、舟木の里の奈具の村にやってきました。そして「此処にして我が心なぐしく成りぬ」(わたしの心は安らかになりました)と云って、この村を安住の地としました。此処で終焉を迎えた天女は村人たちによって、豊宇賀能売命(とよかのめのみこと)として祀られました。これが竹野郡の奈具の社です。

<http://jinja.kojiyama.net/archives/13706>

京都府京丹後市弥栄町船木

■左京鼻岬観音柱 533.30km - 真名井神社 -大沼浮島533.30km

左京鼻岬観音柱

壱岐島誕生神話（生き島神話）の八本の柱の一つ。

伊伎島はあっちこっちへ動いてまわる“生き島”だったので、流されてしまわないようにと、神様は、島をぐるりと囲むように8本の柱を立てて繋ぎ止めた。8本の柱は折れてしまって、いまは岩として残り、折れ柱といわれています。壱岐の観光スポットとして有名な猿岩（さるいわ）と左京鼻（さきょうばな）が、その8本のうちの2つとされていることは、意外と知られていない。

壱岐市芦辺町諸吉本村触

真名井神社

元伊勢。籠神社奥宮。祭神/豊受大神(亦名天御中主神・国常立尊)

『出雲国風土記』意宇郡条に在神祇官社の「真名井社」と不在神祇官社の「末那爲社」の2社が記載されており、また『延喜式神名帳』出雲国意宇郡に「真名井神社」の記載がある。しかし当社は天和3年（1683年）の『出雲風土記鈔』には「伊弉奈枳社」、享保2年（1717年）の『雲陽誌』には「伊弉諾社」と記載されており、江戸時代には「伊弉諾社」と呼ばれていた。明治に入り「真名井神社」と改称した。当社の祭祀は神魂神社の社家である秋上氏が神主と別火を兼ね、社殿も両社を同時期に造営していたという。

古代丹波の最高神である豊受大神（天御中主神又は國常立尊とも云う）を氏神として戴いて、当地方に天降られた天照國照彦火明命は、大神様をお祭りするのにふさわしい神聖なところとして、常世の波の寄せる天橋立のほとりのこの地をお選びになりました。こうして名勝天橋立の北端真名井原に御鎮座、第十代崇神天皇の時に天照皇大神の御霊代が當宮にお遷りになり、吉佐宮と申して豊受大神と御一緒に四年間お祭りされました。元伊勢の御由緒の起こりです。

天照皇大神は人皇十一代垂仁天皇の御代に伊勢国伊須須川上へ御遷宮になり、豊受大神は人皇二十一代雄略天皇の御代に至るまで當地に御鎮座あらせられ、同天皇の御代二十二年に伊勢国度会郡の山田原に遷らせられました。

京都府宮津市江尻

■小島神社 564.165km - 源九郎稻荷神社 - 大沼浮島 564.165km

■小島神社 550.435km - 穴太寺 - 大沼浮島 550.435km

小島神社

祭神/蛭兒命ヒルコノミコト事代主命コトシロヌシノミコト

源九郎稻荷神社

古くは日本三大稻荷のひとつ。源義経が吉野に落ちのびた時、白狐が側室静を送り届けた話は有名。「白狐渡御」の行事がある。

奈良県大和郡山市洞泉寺町15

備考社殿が北西に斜め向きになっている。壱岐と大沼浮島を斜め前にしていると思われる。



■大神宮神社 536.22km - 智恩寺 - 大沼浮島 536.22km

大神宮神社

祭神/天照大神・應神天皇・天兒屋根命 長崎県壱岐市石田町南触

智恩寺

臨濟宗妙心寺派の寺院。山号は天橋山（てんきょうざん）または五台山。「切戸（きれと）の文殊」、「九世戸（くせど）の文殊」、「知恵の文殊」とも呼ばれる。奈良県桜井市の安倍文殊院（安倍文殊）、山形県高島町の大聖寺（亀岡文殊）などとともに日本三文殊のひとつとされる。本尊の文殊菩薩は秘仏。

808年（大同3年）の平城天皇の勅願寺として創建されたという。延喜年間（10世紀初頭）には、醍醐天皇から勅額を下賜されたというが、以後、中世までの歴史は判然としない。当初は密教（真言宗）の寺院で、禅宗寺院になるのは南北朝時代以降である。

京都府宮津市文珠466

備考 社殿が北西に斜め向きになっている。壱岐と大沼浮島を斜め後ろにしているとされる。



■ 嶽宮神社 542.62km - 宇治神社 - 大沼浮島 542.62km

嶽宮神社（小呂島）

祭礼として、毎年7月15日に山笠が行なわれる。福岡本土の博多祇園山笠とは違い、朝夕の2回練り歩くのが特徴である。また、8月18日には「ゴホーラク」という神楽が奉納されるが、かつては「万年願（マンネンガン）」という名で歌舞伎役者を招いての指導による歌舞伎を奉納するものであったという。

小呂島の名が文献上に登場するのは鎌倉時代のことである。島の氏神である七社神社の棟札には、宗像郡東郷村の住人の名がある。建長4年7月12日の『関東御教書』には筑前国志摩郡となっており、宗像大社の社領であった島に関して、中国系博多商人であった謝国明が妻の地頭を名乗って領有権を主張したことで領地争いになり、宗像社雑掌が鎌倉幕府に社役対捍を訴え、幕府が謝国明に戒告したことを記録している。

福岡県福岡市西区小呂島



宇治神社

式内社 祭神/菟道稚郎子命（うじのわきいらつこのみこと）

『日本書紀』では「菟道稚郎子」、『古事記』では「宇遲之和紀郎子」と表記される。第15代応神天皇の皇子。天皇に寵愛され皇太子に立てられたものの、異母兄の大鷦鷯尊（のちの仁徳天皇）に皇位を譲るべく自殺したという美談で知られる。本殿には、菟道稚郎子像と伝える神像（国の重要文化財）が祀られている。創建年代などの起源は明らかではない。宇治神社のすぐ近くには宇治上神社があるが、宇治神社とは二社一体の存在であった。宇治上神社の境内は『山城国風土記』に見える菟道稚郎子の離宮「桐原日桁宮」の旧跡であると伝え、両社旧称の「離宮明神」もそれに因むといわれる。宇治上神社の境内外には「天降石」や「岩神さん」と呼ばれる巨石があり、磐境信仰による創祀という説もある。

京都府宇治市宇治山田宇治山田1

備考

古代は、丹後半島を中心にして近畿は丹後王国、出雲族の拠点だった説がある。壱岐の神々と蝦夷の大沼浮島の神々に守られているしくみ。壱岐は最初の上陸地だったのだろうか。ただ、壱岐の神様は随分入れ替わったり、場所を変えさせられたりして混沌としているようだ。弥生時代の原の辻遺跡の祭儀場が本当に中心で聖地になっているか気になり、島内のしくみを少しだけ探してみた。次頁へ。

原の辻遺跡 祭儀場



しくみ

(緑色)

- 小島神社 (石田) 2.25km - 原の辻遺跡 祭儀場 - 深江川北塔之山観音堂 2.25km
- - 定光寺 2.25km

(薄緑色)

- 小島神社奥宮 2.27km - 原の辻遺跡 祭儀場 - 貴船神社 2.27km
- - 大國玉神社 2.27km
- - 兵主神社 2.27km
- - 深江川北塔之山大師堂 2.27km

(オレンジ色)

- 左京鼻龍神社 5.44km - 原の辻遺跡 祭儀場 - 左京鼻岬 観音柱 5.44km
- - 祥雲寺 5.44km
- - 光福寺 5.44km
- - 左京鼻岬 観音柱 5.44km

(赤色) ※詳細欄に地図あり

- 小島神社 (芦辺) 4.52km - 小島神社 (石田) - 兵主神社 2.27km

しくみ詳細

(緑色)

- 小島神社 (石田) 2.25km - 原の辻遺跡 祭儀場 - 深江川北塔之山観音堂 2.25km
- - 定光寺 2.25km

小島神社

祭神/蛭兒命ヒルコノミコト事代主命コトシロヌシノミコト

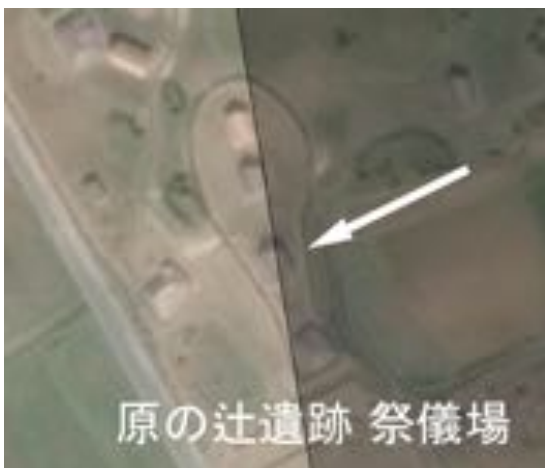
原の辻遺跡 祭儀場

弥生時代の環濠集落で、『魏志』倭人伝に記された「一支国（いきこく）」の王都に特定された遺跡。「祭儀場」としての機能が 想定されることとなった理由は、地形が周囲よりも1~2mほど高く盛り上がり、丘陵最高所の尾根に沿って配列された建物跡で、主軸方向がほぼ等しいこと。周辺から隔絶された特殊な空間。何らかの特別な意図があって構築されたものと考えられる。

<http://www.iki-harunotsuji.jp/wp-content/themes/notesil/pdf/23report.pdf>
 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触 1 0 9 2-1

定光寺

不明 壱岐市芦辺町湯岳本村触 2 2 2-1



(薄緑色)

- 小島神社奥宮 2.27km - 原の辻遺跡 祭儀場 - 貴船神社 2.27km
- - 大國玉神社 2.27km
- - 兵主神社 2.27km
- - 深江川北塔之山大師堂 2.27km

小島神社・奥宮？

空からの写真を見ると神社北側の海岸にこんもりした所がある。御神木や岩座があるでは。さらにそこに向かって西から参道らしきものも見える。鳥居と神社とこの奥宮は真っ直ぐに並び、原の辻遺跡祭儀場に向いているように思える。壱岐市石田町印通寺浦

貴船神社

無各社。民家の敷地内にある神社。境内社や石灯籠もあるのでそれなりに古い神社のよう。壱岐名勝図誌では石志（石志三九郎）氏の館に鎮座と書かれているが、今は竹下氏のお宅の脇。

闇おかみ神（クラカミノカミ）、闇岡象女神（クラミズノメノカミ）、闇山津見神（クラヤマズミノカミ）

長崎県壱岐市郷ノ浦町平人触 7 8 0

大國玉神社

通称、田原（タイバル）天神。現在の主祭神は、大己貴命だが、延宝四年に式内に比定される以前は、大國魂命を祀っていた。国府にも近いので、壱岐全体の国魂を祀っていたのではないか。ちなみに、



大己貴命の別名・大国主命の「主」の字は、点の位置を変えると「玉」となり、大国玉命と考えられる。境内社に愛宕神社（石祠）があるが、その工事中に祝部土器が出土。また、大正13年には、弥生式土器も出ている。境内には、前方後円墳があるらしい。そういわれれば、どこか古墳のような雰囲気だが。祭神/大己貴神 大后神 事代主神 菅贈相國 吉祥女 中將殿 宰相殿

延宝以前は 大國魂命

http://www.genbu.net/data/iki/ookunitama_title.htm

長崎県壱岐市郷ノ浦町大原触

兵主神社

式内兵主神社として、現在存在しているが、複雑な経緯がある。古号は「日吉山王権現」。延宝四年（1676）の橘三喜の式内社調査では、当社を聖母神社、現聖母神社を兵主神社とした。その後、延宝七年（1679）箱崎八幡宮祠官吉野末益が異を唱え、藩もそれを認め、聖母神社を正しく聖母神社と戻したが、当社（日吉山王権現）は、そのまま兵主神社となってしまった。嵯峨天皇の御代に、山城國日吉山王を勧請した。勧請に関する伝説では、比叡山より村の卯辰の海辺一の瀬に着御し、谷山（今の京徳の丘）に鎮座となった。勧請の供をしたのが、京徳・甫久・大宝の三氏で社家となった。祭神/素盞鳴尊 大己貴神 事代主神

http://www.genbu.net/data/iki/hyousu_title.htm

長崎県壱岐市芦辺町深江本村触



深江川北塔之山大師堂

不明 壱岐市芦辺町深江本村触

(オレンジ色)

- 左京鼻龍神神社 5.44km - 原の辻遺跡 祭儀場 - 左京鼻岬 観音柱 5.44km
- - 祥雲寺 5.44km
- - 光福寺 5.44km

左京鼻龍神神社

「左京鼻」の由来はいろいろあるが、江戸時代の初めころ雨が降らず作物は枯死にひんし人々は苦しんでいた。陰陽師の後藤左京と龍蔵寺五世日峰和尚が一身に祈祷したが雨は降らなかった。後藤左京はこの断崖から身を投げようとした時、大雨が降ったと言う。この話よりこの岬を左京鼻と言うらしい。

左京鼻の先端に赤い鳥居の左京鼻龍神が鎮座されている。

壱岐市芦辺町諸吉本村触

左京鼻岬 観音柱

壱岐島誕生神話（生き島神話）の八本の柱の一つである。



伊伎島はあっちこっちへ動いてまわる“生き島”だったので、流されてしまわないようにと、神様は、島をぐるりと囲むように8本の柱を立てて繋ぎ止めたそうです。8本の柱は折れてしまって、いまは岩として残り、折れ柱といわれています。壱岐の観光スポットとして有名な猿岩（さるいわ）と左京鼻（さきょうばな）が、その8本のうちの2つとされていることは、意外と知られていません。

左京鼻龍神神社が近くにある。壱岐市芦辺町諸吉本村触

備考/祭儀場と観音柱の同距離に神社が創られてある。



祥雲寺

不明 壱岐市郷ノ浦町牛方触

光福寺

不明 壱岐市郷ノ浦町本村触100

(赤色)

■ 小島神社（芦辺） 4.52km - 小島神社（石田） - 兵主神社 2.27km

小島神社（芦辺）

壱岐のモンサンミッシェル。児島神社。

祭神/伊弉册尊、軻遇突智命、埴安姫命 神楽は700年の歴史がある
壱岐市芦辺町諸吉二亦触1969番地

小島神社（石田）

祭神/蛭見命ヒルコノミコト事代主命コトシロヌシノミコト
壱岐市石田町印通寺浦



備考

少し探ただけでたくさんのしくみが見つけられた。祭儀場と小島神社を線でつなぐと、小島神社の奥宮（推定）、神社、参道、鳥居に、祭儀場の三つの建物が線上に乗る。建物が同じ向きをしていることが祭儀場と決定する一つの理由になっている。石田の小島が一支国の玄関口的な聖地だったのでは。やはり、壱岐の中心地の祭祀場なのだと思う。同名の壱岐のモンサンミッシェルと呼ばれる芦辺の小島神社とも繋がっていた。探せばいくらでも見付きそうだが、きりがないので割愛する。こうやって調べれば、うやむやとなってしまった古代の壱岐の歴史がもっと見えてくるはず。壱岐市の歴史家の皆さんに託したい。

